

伊豆半島の衝突と勝沼のブドウ栽培・ワイン文化

興水 達司

山梨県立大学地域研究交流センター

1 はじめに

甲州市勝沼町におけるブドウ栽培及びワイン文化について、その土台をなす地形や地質の特性を理解するためには、百年や千年といった時間軸を超えた“地質学的な時間スケール”からの説明が効果的と考え、この事情から今回の話題提供のタイトルとして、「伊豆半島の衝突」という言葉を私は用いた。

2 甲府盆地を含む本州中央部の大地形成史

勝沼地域は甲府盆地の東部に位置し、そこには扇状地が発達している。この扇状地のでき方については、単に甲府盆地という視点で捉えるのではなく、まずは本州中央部や日本列島の視野から読み解くべきである。その過程において、勝沼地域のシンボリックな「ぶどうの丘の成り立ち」がスムーズに理解され、同時に勝沼一帯のブドウ栽培やワイン文化の礎を歴史科学的に、あるいは物語的に知ることができるだろう。そこで、「ぶどうの丘はどうして丘になったのか？」という謎解きを主体に、以下に報告する。



写真1 南東方向から望むぶどうの丘

ぶどうの丘は、甲府盆地の東部に奇妙な丘として認められ、このぶどうの丘を構成する地盤（地層）は、“かつての南海トラフ”に堆積したものである、ということが20世紀の後半に理解できるようになった。この南海トラフ堆積物は、伊豆半島の衝突などで北に移動し、

さらに本州中央部の屈曲史を経て、現在に至っている。このような地質学的プロセスを経て、過去には海底にあった堆積物が、甲府盆地に対してその背後を形つくっている高標高の南アルプス・大菩薩山系などの山岳地域として成り立ったのである。

実際に、山梨県の地質分布を見渡してみると、甲府盆地西部の南アルプスから盆地北部の昇仙峡地域に、さらに盆地東部を構成する大菩薩山系などに及ぶ一連の山地には、四万十帯と呼ばれる地層が分布している（図1）。この地質図の群青色～ブルーに塗色されている地域（八ヶ岳山麓のそれは除く）こそ、かつて数千万年前の時代に南海トラフを埋め尽くしていた地層である。

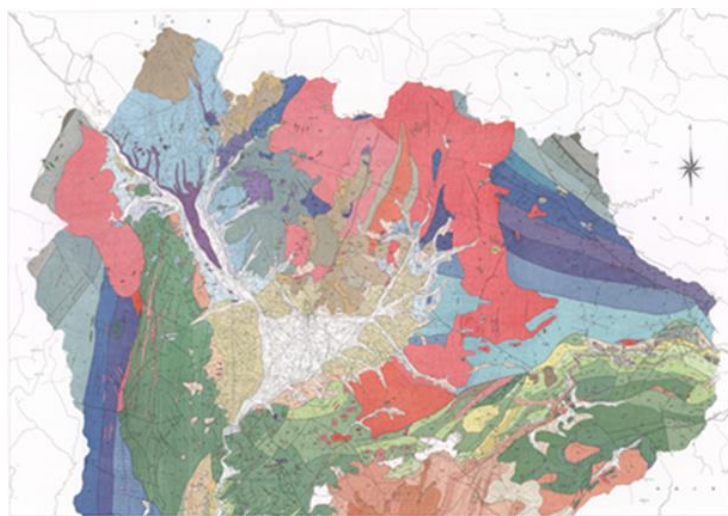


図1 山梨県の地質図（山梨県地質図編集委員会, 1970）

そもそも四万十帯が南海トラフに溜まっていた当時の、その分布は現在の四国・四万十地域の南岸沖の海から東に、現在の千葉県沖の海に至る範囲に、ほぼ直線的な形態であった。この直線的なトラフ堆積物の四万十帯（地層）が、現在我々が身近に見ている甲府盆地を取り囲むように屈曲して分布している、ということが一般にはにわかには信じられないかも知れない。この仕組みを端的に説明するのが、南の海から本州に概ね直角に向かう水平的なプレートの動きであり、今も続く伊豆半島などの日本列島への衝突事件である。

このような仕組みによる山の成り立ちも含めて、大地形成が水平的な地球表層部の動きの中で理解できるようになったのは、今から数十年前の最近のことである。そして、人が生きる百年程度の時間軸はもちろん、数千年前の文字記録などを遥かに超える時間スケールで、現在では大地形成がダイナミックに理解できる状況になってきた。この辺の詳細については、日本列島の北側の日本海の形成史にも触れる必要があるが、今回はこの点は割愛する。

結局、長い地球史を経て、現在では甲府盆地を取り囲んで分布する四万十帯としては、図2の状況にある。この四万十帯の分布に至る過程に、ぶどうの丘を含む勝沼地域の土台形成史としてのユニークな物語が潜んでいる。

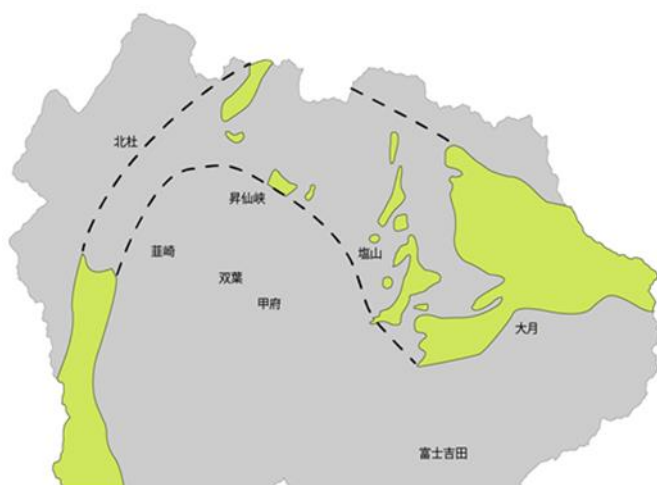


図2 山梨県内の四万十帯の分布（黄緑色の部分）

3 勝沼地域の扇状地

今まで説明してきた山を凸に形成する地球の歴史から転じて、これ以降では山地の浸食・運搬作用について紹介しよう。すなわち、高標高域から相対的に低標高の甲府盆地側に土砂運搬が活発になる過程で、甲府盆地周辺域には概して規模の大きな扇状地が形成されてきており、例えば盆地西部には御勅使川扇状地が、また盆地東部には勝沼扇状地などが見られる。この扇状地形成のプロセスを、勝沼地域につき、少し詳しく説明するため、図1の一部を塩山・勝沼・一宮地域の地質分布として拡大したのが図3である。

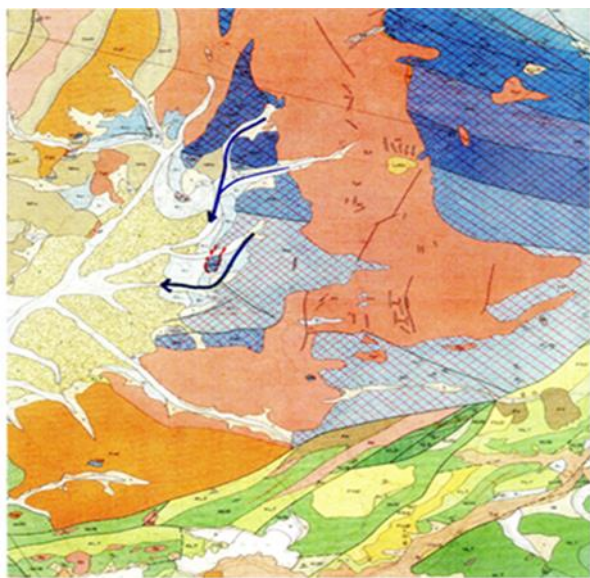


図3 塩山・勝沼・一宮地域の地質分布（山梨県地質図編纂委員会, 1970）

この図3で、青色系の中で網掛（クロス加筆）の部分が海底堆積物の四万十帯であり、オレンジ・ピンク系の地質は四万十帯に貫入した花崗岩類である。さらにこの図から、塩山市街地と勝沼町東部のそれぞれ2箇所に、網掛の四万十帯が“飛び石の分布”として認識でき、この飛び石のうち、塩山市街地のそれは「塩の山」であり、勝沼町の東部のそれは「ぶどうの丘」である。これらの飛び石は、それぞれの背後に分布する網掛地域の四万十帯と一体の地層として、かつて（約数十万年前頃まで）は分布していた。

つまり、ぶどうの丘は、その北部に分布する四万十帯の地質と一体であり、当時の河川系は現在とは別ルートが推定できそうである（図3）。その後の時間経過の中で、少なくとも今から十万年～二十万年前以降の時間幅にわたって背後の土砂流出などで、またこの間には、これら河川の流れが変化することにより、ぶどうの丘が現在のように孤立分布することになった、と考えると大きな矛盾はない。塩山駅の北方の塩の山も同様なシナリオで説明できる。

さて、これだけで、勝沼地域の大地の物語は終わらない。過去に遡って地球史スケールで勝沼の大地の仕組みが理解できる一方で、未来の勝沼やぶどうの丘を考えてみると、自然がもつ本来の姿として、継続する侵食作用によってぶどうの丘は、いずれは丘としての形態を失ってしまう運命にある。つまり、その周辺域と同じようにぶどうの丘も扇状地形になる。この点では、ぶどうの丘の一带は、日本列島形成史の重要な局面をコンパクトに理解することが可能な場所であり、しかも扇状地形成において進行状況の違うステージの地形が近接して観察できるなど、地球科学分野からは間違いなく第一級の優れた教材としての意味をもつ。このように、ぶどうの丘やその一带は、背後の山地から侵食・運搬作用が概して活発な地域であったわけである。この作用によって、勝沼扇状地が発達した。そして扇状地は、一般的に水はけが良く、そこはブドウ栽培やワイン文化の発達に適した地域ということになる。

ということで、ここまでの大地形成史からは、勝沼地域の地形・地質の特性として、背後の山地から土砂運搬が活発な地域であり、この地域を特徴づける要因として「降水量」などが多い地域と思われるかも知れない。ところが、山梨県の降水量分布を広く見渡してみると、勝沼地域はむしろ降水量が乏しい地域に位置づけられる（図4）。図4の降水量分布からすると、勝沼付近は山梨県内の年間降水量の中でもっとも少ない1500mm以下のエリアに入っている。

この降水量の多さ（少なさ）の点では、甲府盆地の西に位置する御勅使川扇状地とは明らかに違うのが勝沼扇状地である。しかも勝沼地域のように降水量の少ない山麓斜面は、甲府盆地の背後地域には、勝沼付近から北西の甲斐市双葉町に、さらに北杜市明野町・須玉町などに向かって広く認められる（図4）。ちなみに、甲府盆地の北側山麓斜面の扇状地一带に降水量が乏しい地域が分布する要因を説明するには、図4の降水量の多い地域に、高標高の富士山や南アルプスなどの3000メートルを超える山の存在が重要となる。

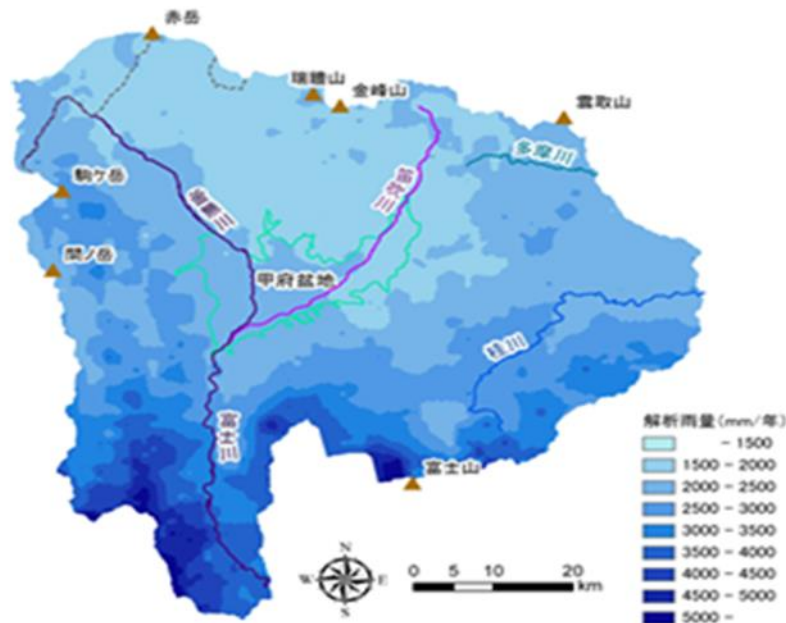


図4 山梨県内の降水量

4 まとめ

以上のように、伊豆半島の衝突に始まる本州中央部の地形・地質の成り立ちから、勝沼地域の大地の歴史を辿り、そのうえに降水量などの気象条件を加味してみると、水はけが良く降水量が乏しく日照時間が長い、という自然特性は確かに勝沼の特徴として浮き彫りにすることができる。しかし、実は同じような自然条件は、甲府盆地の背後域には勝沼付近から北杜市に及ぶゾーンとして広く認められることにもなる。つまり、地形・地質などの自然的な条件から見れば、甲府盆地周辺にはブドウ栽培にふさわしいのは勝沼地域以外にも存在する、ということになる。この状況において、勝沼地域が現在のようにブドウ栽培そしてワイン文化の本邦のフロントランナーとして牽引できるまでには、私の専門とする地形・地質の理解のうえに、さらに人文的な説明や評価などが必要となる。

この点は、他の研究分野も含む総合理解によって、先人達が築いてきた勝沼のブドウ栽培・ワイン文化の保全に努めつつ、この宝を未来に繋げたい。